

# 琉球大学学術リポジトリ

## 万葉仮名の前と後

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2013-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上村, 幸雄, Uemura, Yukio メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/26043">http://hdl.handle.net/20.500.12000/26043</a>

# 万葉仮名の前と後

上 村 幸 雄

## 〔要約〕

- ① 万葉仮名が成立する前の前史と、万葉仮名から音節文字としての2種類の仮名文字、すなわち片仮名と平仮名が成立する道すじとを、表によって概観した。
- ② それらの仮名が日本漢字音の中の呉音によったのか、それとも同じく漢音によったのか、あるいは慣用音と呼ばれる音によったのか、はたまた、漢字の訓によったのかを、個々の仮名文字ごとに示した。
- ③ 万葉仮名に用いられた多数の漢字のうち、どの漢字が片仮名・平仮名に選ばれたのかは小学館の「日本国語大字典(第2版、2000)」の各50音の項目の第一ページ目に表として掲げられており、この論文に掲げてある表も、それに基づいて筆者が作成したものである。
- ④ 日本語の50音図のそれぞれの片仮名・平仮名のもととなった漢字が、それが輸入されたもとの中国語においてどのような発音を表す漢字であったのかは藤堂明保編の「学研漢和大字典」(学習研究社、1980)所収の各漢字の項目に記載された情報に依っている。

同辞典は数ある漢和辞典のうち、筆者の知る限り、唯一各漢字ごとに中国語の音韻に関する詳しい情報が記載されている辞典であるが、それは編者の藤堂明保(1915～1985)が中国語音韻史の専門家として同辞典の編集に当たったためである。筆者のこの稿では、同辞典における所載の漢字の何ページに載っているかを、算用数字で示してある。そのページを開けば、問題の漢字の中国語音韻史上の詳しい情報を知ることができる。すなわち、周漢時代の上古音から、隋唐の時代の中古音、そして元の「中原音韻」、そして現代の

北京の中国語に至る音韻の変遷が発音記号によって示されている。そして現代北京語については、ピンイン(拼音)によるローマ字表記と四声の区別とが示されている。また、漢字ごとの日本漢字音における呉音と漢音、そしていわゆる慣用音などの区別、また主要な訓も記載されている。さらには意味、また日本の国字としての意味・用法についての記載も見られる。ここでは煩雑を避けて、「学研漢和大字典」の所載ページのみを示したのである。

### 〔略号の説明〕

<sub>1</sub>(小さい下付きの数字) = ローマ字書きした場合の上代特殊仮名遣いにおける  
甲類の仮名

<sub>2</sub>(小さい下付きの数字) = ローマ字書きした場合の上代特殊仮名遣いにおける  
乙類の仮名

G = 日本漢字音における呉音

K = 日本漢字音における漢音

唐 = 日本漢字音における唐宋音

慣 = 日本漢字音における慣用音

訓 = 日本漢字における音読みに対する訓読み

### 〔仮名文字一覧表〕

50音図のローマ字表示		片仮名			平仮名		
学研大漢和の掲載頁							
a	1414	ア	G K ア	阿	あ	G K アン	安
i	52	イ	G K イ	伊	い	G K イ	以
u	348	ウ	G K ウ	宇	う	G K ウ	宇
e	1173	エ	(ヤ行のyeの項参照)		え	G エ	衣

o	583	オ GKオ	於	お GKオ	於
ka	156	カ Kカ	加	か Kカ	加
ki <sub>1</sub>					
ki <sub>2</sub>	416	キ Kキ	幾	き Kキ	幾
ku	26	ク Gク	久	く Gク	久
ke <sub>1</sub>	45	ケ Gケ	介		
ke <sub>2</sub>	1204			け Kケイ	計
ko <sub>1</sub>					
ko <sub>2</sub>	401	コ Gコ	己	こ Gコ	己
ga	1255	ガ Gガ	賀	が <sup>レ</sup> Gガ	賀
gi <sub>1</sub>					
gi <sub>2</sub>	416	片仮名キ+濁点		平仮名き+濁点	
gu		片仮名ク+濁点		平仮名く+濁点	
ge <sub>1</sub>					
ge <sub>2</sub>	45	片仮名ケ+濁点		平仮名け+濁点	
go <sub>1</sub>					
go <sub>2</sub>	401	片仮名コ+濁点		平仮名こ+濁点	
sa	570	サ GKサン	散	さ GKサ	左
si	24	シ GKシ	之	し GKシ	之
su	1469	ス Gス	須	す Gスン	寸
se	19	セ Gセ	世	せ Gセ	世
so <sub>1</sub>					
so <sub>2</sub>	614	ソ Gソ	曾	そ Gソ	曾

za	570	片仮名サ+濁点	平仮名さ+濁点
zi	24	片仮名シ+濁点	平仮名し+濁点
zu	1469	片仮名ス+濁点	平仮名す+濁点
ze	19	片仮名セ+濁点	平仮名せ+濁点
zo <sub>1</sub>			
zo <sub>2</sub>	614	片仮名ソ+濁点	平仮名そ+濁点
ta	298	タ GKタ 多 306	た 慣タ
ti>ci	175	チ 訓チ 千	ち GKチ
ti>cu	398,398	ツ Gツ 川、州(津の訓?)	つ Gツ 川、州(津の訓?)
te	307	テ GKテン 天	て GKテン 天
to <sub>1</sub>			
to <sub>2</sub>	684	ト GKシの訓トマル 止	と GKシの訓トマル 止
da	298	片仮名タ+濁点	平仮名た+濁点
di>zi	175	片仮名チ+濁点	平仮名ち+濁点
du>zu	398	片仮名ツ+濁点	平仮名つ+濁点
de	307	片仮名テ+濁点	平仮名て+濁点
do <sub>1</sub>			
do <sub>2</sub>	684	片仮名ト+濁点	平仮名と+濁点
na	315	ナ GN ナ 奈	な GN ナ 奈
ni	34	ニ GN ニ 二 47	に GN ニ 仁
nu	320	ヌ GN ヌ 奴	ぬ GN ヌ 奴
ne	928	ネ GN ネ 祢(=禰)	ね GN ネ 祢
no <sub>1</sub>			

no <sub>2</sub>	26	ノ	Gノ	乃		の	Gノ	乃
pa>φa>ha	110	ハ	Gハチ	八	723	は	GKハ	波
pi <sub>1</sub> >φi>hi	698	ヒ	GKヒ	比		ひ	GKヒ	比
pi <sub>2</sub> >φi>hi								
pu>φu>hu	16	フ	Gフ	不		ふ	フ	不
pe <sub>1</sub> >φe>he	1348	ヘ	訓ヘ	部		へ	訓ヘ	部
pe <sub>2</sub> >φe>he								
po>φo>ho	78	ホ	Gホ	保		ほ	Gホ	保
ba	110	片仮名ハ+濁点				平仮名は+濁点		
bi <sub>1</sub>								
bi <sub>2</sub>	698	片仮名ヒ+濁点				平仮名ひ+濁点		
bu	16	片仮名フ+濁点				平仮名ふ+濁点		
be <sub>1</sub>								
be <sub>2</sub>	1348	片仮名ヘ+濁点				平仮名へ+濁点		
bo	78	片仮名ホ+濁点				平仮名ほ+濁点		
ma	13	マ	慣マン	万		ま	Gマチ	末
mi <sub>1</sub>	8	ミ	訓ミ	三		み	Gミ	美
mi <sub>2</sub>								
mu	813	ム	Gム	牟	686	む	Gム	武
me <sub>1</sub>								
me <sub>2</sub>	319	メ	訓メ	女		め	訓メ	女
mo	699	モ	Gモウ	毛		も	Gモウ	毛

ya	30	ヤ GKヤ	也	や GKヤ	也
yu	855	ユ Gユ	由	ゆ Gユ	由
ye	709	エ 訓エ	江	え (ア行のeの項参照)	
yo <sub>2</sub>	15	ヨ GKヨ	与	よ GKヨ	与
ra	1086	ラ Gロウ<ラウ	良	ら Gロウ<ラウ	良
ri	141	リ GKリ	利	り GKリ	利
ru	859	ル Gル	留	る Gル	留
re	918	レ Gライ礼(cfKレイ)		れ Gライ	礼
ro <sub>1</sub>					
ro <sub>2</sub>	222	ロ Gロ	呂	ろ Gロ	呂
wa	227	ワ Gワ	和	わ Gワ	和
wi	38	ヰ 訓イ<ヰ	井	786 ゐ GKイ<ヰ	為
we	468	エ Gエ<エ	恵	ゑ Gエ<エ	恵
wo	27	ヲ Gオ<ヲ	乎	1332 を Gオン<ヲン	遠
N (元暦校本万葉集) 587	ン Gム	无	ん Gム	无	

### 〔あとがき〕

この研究は筆者が長年に亘って行ってきた日本語音韻史・文字史の研究の一部であるが、関連する問題で、ここで触れられなかった問題も少なくない。その中には、一音節を表して表音的に用いられた地名・人名を表す漢字全体についての展望である。例えば名古屋・名護などの表記に用いられる漢字「名」、あるいは那覇・那智などの表記に用いられる漢字「那」、地名の

安房と阿波、亜細亜・磐梯吾妻の「亜」「吾」、同じく人の姓を表す那須さんの「那」、安倍さんと阿部さんの「安・阿」「倍・部」などの日本人にはなじみ深い日本語史上の使い分けなどを網羅的に研究・調査することなどである。これらの研究テーマに関しては筆者としては他日を期したい。(2012-10-3欄筆)